

騒がしくてやがて空しい「国葬」かな

2022年9月29日三上治



9月23日(祝)に僕は友人の「偲ぶ会」をやった。かつて1960年の安保闘争を共に戦い、それ以来の長年の友人だった3人を追悼するためだった。その一人はこの経産省前のテントにも参加され、しばしば季節の果物やワインなどを差し入れていただいていた由井格さんだった。由井さんは今年の8月になくなられたが、野辺送りも出来なかったので「偲ぶ会」をやった。

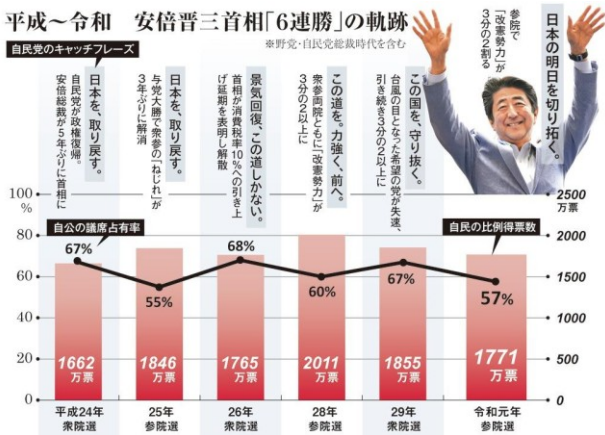
コロナ禍とやらで、巷では野辺送りもできない状態にある。また、「偲ぶ会」や「追悼の会」のようなことも開きにくい。これは病院や施設とやらに面会もままならないことの続きのようなことだ。「密」になることが禁じられている結果である。それに比べれば安倍晋三の「国葬」はおおっぴらだった。この時節にねえ、というのが最初の感想だったが、これはその悲劇的な死では許されることかな、と思った。ただ、僕がそこでまず、感じたのはこの国葬につきまとう不純さだった。

国葬であれ、自民党葬であれ、人の死に対して生前何らかの関係にあった人が、その死を悼み、弔いをしようとするのは自然である。人間的な所業であり、誰からもとがめられることではない。形式の如何にかかわらず。だが、そうであるが故に人はそこに人の死を悼む、あるいは弔う自然な気持ちがなければならない。そんなことはいう及ばないことというかもしれない。僕は岸田首相が安倍の死に対してそういう気持ちがあったのか、どうか疑念を持った。いうならそこに不純なものを感じたのだ。不純なものとは政治的なものと言っていい。僕は思い出すが、戦争での死者に対する弔いである。英霊として靖国神社に祀るという国家的所業に国家的目的というか動機に不純なものを僕は感じる。はじめから国家や権力は国家意識の高揚を目的としていたのだとしても、そこに僕は人間の死に対する不純なもの、あるいは不徳なものを感じる。不可避に戦争に加わり、そこで死に直面せざるをえなかった人々への哀悼としてはおかしいと僕は思う。



岸田には安倍への深い思いがあってやむに已まれぬものとして、この追悼を決意したとは思えない。僕はそこに政治的な動機を感じた。これは僕の変な勘ぐりなのだろうか。そうなら、誤らざるをえないが、それでも、その方がよいことだろう、と思う。岸田は政治家なのだけ。政治的に考えて当たり前だという、声も聞こえる。で

もそうなら、それは政治的にも失敗だと思えてならない。僕はこの国葬にこんな疑念を持ったのだが、それは今も消えない。国葬に対する説明不足という人々の批判は岸田の言葉に切なるものが感じられないということだった、と思う。



岸田の動機の中に感じた疑念は私的なことであるが、このことから少しはなれば、今回の国葬に感じた疑念は、安倍政治は国葬に値する政治だったのか、ということがある。誰がみてもその政治が国葬に値するというのは難しいことかもしれないが、安倍政治はそうではなかったという思いが僕には強くある。岸田は今回の国葬の理由に「安倍が長期の政権担当者であったこと、つまりは憲政上の最長の首相であったこと」を上げて

いる。確かに、安倍は長期の政権担当者だったし、それにはご苦労なことも山ほどあったと思う。けれども、この間にやった安倍政治が国葬に値するものだったか。僕は疑問に思う。このところでも岸田は安倍政治が国葬に値する政治と考えていたのか、どうか疑問なのだが、少なく見積もっても僕は二つのことを指摘できる。彼の非民主的な政治態度であり、もう一つは彼の「戦争」と呼び込む国家方針である。ただ、話が長くなるので。今回は彼の非民主的な政治のことに触れる。

それは安倍政治が民主主義の否定の政治だったということだ。国葬の理由に民主主義を守るということが掲げられているが、安倍の政治は国葬に値するような民主政治だったかということだ。僕の結論は逆である。

一般には民主主義の危機だとか、今こそ民主主義をまもれという、この国葬も銃撃による言論封じという非民主的行為に対して民主主義を守るためという。安倍は「日本を取り戻すとか」とか、「美しい日本」とかのナショナリスティックな言説と「自由と民主主義と人権」という価値観を保持するという言説を掲げてきた。いうなら彼は民主主義を標榜していた、果たして彼は民主主義を実践していたのか、安倍政治は民主主義政治だったのか。そうではなかった、非民主的政治だった、というのが僕の認識であるが、これには説明があると思う。

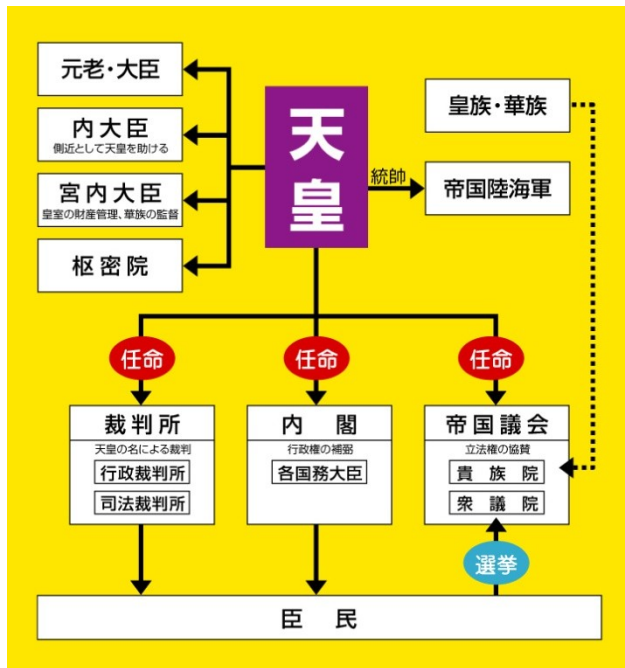


世界ではプーチンも習近平もトランプもバイデンもみんな民主主義をいう。

民主主義にもいろいろとある。多分、僕らはプーチンにもトランプにもその民主主義は変だというか、ちよいと違うと思う。例えば、プーチンが西欧流ではない東方の民主主義だと言っても、そんなあほなことはない、彼の政治は強権的で専制的なものであり、彼の政治を誰も民主的ではないと思う。頻繁に人殺しなどがある統治(政治)が民主的なものであるはずはない。非民主的なものとすぐに実感できる。

けれども、じゃあ民主主義って何なんなのだとすると以外わかりにくい。国民主権とかいろいろの言葉があるが、それは国家統治の方法であり、様式である。国家を統治する、国家の意思決定をなす方法である。国家の意思(政策や方向)を決めていく方法のことである。それは国民の意思において決めていくとか、意思の自由な発現を基盤にしてとかいわれるものだ。国民主権とか自由な意思決定において国家意思が決められていくというものであり、より具体的にいえば「議論による統治」ということである。「議論による統治」というのは意思決定が議論、つまりは討議よって行われると言いうことである。過程(手続きが)民主主義というのはこの討議の過程ことであり、この手続を経て意思の決定(合意)なされるということである。僕らは民主主義を多数決による決定の原理というように教えられてきた。

これは独裁者の意思決定対してのことという面を表しており、どうしても意思決定を行わなければならないとこに方法であり、多数決による決定が民主主義ではない。国民の意思や意思の自由な発言が「議論」という形で現実化していくこと、そういう方法での意思の決定(合意形成)が民主主義である。逆にいえば意思決定が「議論」を経ずに決定されていくことが非民主主義なのである。この場合に権力なり、支配共同体にあるものが国家の意思を決めていくことであり、国家の成員それに隷属していくのである。強制力を伴った隷属か自発的隷属は別にして自己と関係のないところで意思決定に従わされるのである。これは「議論」ではなく、「慣習による統治」といわれるものである。



例えば、「天皇の統治」というのがある。それは歴史的に天皇が決めた統治を慣習として受け継ぐというものである。国体が盛んに主張され、それは「天皇の統治」だと言われた。その主張をした人もそれが何かを説明出来なかったものだった、といわれる。この天皇の統治は「慣習による統治」であったのだが、それは権威による統治であった。そのためには天皇が神であったのだが、神つまり、宗教的な権威に統治だった。国家の意思決定が天皇という権威による意思決定であり。慣習による意思決定であった。国民(市民や地域住民)の意思とその自由な意思表示によって国家意

思が決定されていくという民主主義は「天皇の統治」(国体)の対極にあるものだ。



安倍は自分が民主主義ものであると自認していたが、その政治的態度、あるいは政治的手法は「議論」を経て、あるいは「議論を持って意思決定とする」ということをやらなかった。一つひとつ例をあげなくともいいが。僕は彼の祖父の岸信介が1960の安保批准において警官を導入に反対派暴力的に排状した強行採決が非民主的な行為として国民的な非難を浴びたことを想起する。これは「議論を経て意思決定」をするという民主主義の否定であり、この議論を暴力的に封じての採決だった。それは非民主的な独裁的政治と言われた。

当時、これは独裁政治として批判された。多数決による決定という形式的に民主主義を踏まえたとして岸たちは居直ったが、本質的な民主主義の否定であり、暴挙であるとして多くの人が非難した事だった。安倍は祖父たる岸のこのときの政治手法を踏襲し、強行採決を常套手段としてとってきたが、そもそも、「議論による統治、つまりは意思決定」を鼻から無視してきた。議会軽視というが、議会が「討議による統治(意思決定)」の場としてあること、それが国民主権や自由な意思の発現の場(歴史的形態)であることを鼻にもかけないでいたのだ。

彼は頭から無視していた。オリンピック委員会で森喜郎が議論(発言)について述べ反発をかったことを想起すればいいのかもしれない。彼らにとって議論は翼賛的なものか、形式上の必要ご

とに過ぎない。彼は政治家に要求されるものが議論をできる能力であること、つまり立法能力とは議論を組み立て指導できることを無視した。というよりはこういう認識を持っていなかった

彼は自分を「闘う政治家」と称していたが、闘うということはどういうことかわかっていなかった政治家である。意思を暴力的、あるいは実力的に通すことを「闘う」ということと錯覚していたのかもしれないが、それは強権的、専制的政治家がとる方法であり、彼は「議論をできない」というコンプレックスをこんな風に解決しようとしていたと想像すらできる。

安倍は憲法改正に執心していたが、そもそも憲法についてどのように理解しているのか疑問だった。国民主権とか、自由な意思の発現とか、いうなら立憲主義的な意味での憲法理解には程遠いところにあると思っていた。これは彼が自分は「自由と民主主義と人権」という価値観にあるということを繰り返しているのをみながら、疑問に思ってきたことでもある。統一教会との関係を見ても明白だが、彼にはこのような理念とは関係ないというか、むしろその反対側にあるものだった。プーチンや習近平が民主主義をかかげても、その対極にある存在のように、彼は国家主義というか、そういう思想を祖父の岸信介から学んだのだと思う。

彼は統治主体が国家権力を構成する権力の部分にあり、国民主権には否定的だったし、自由ということにも否定的だった。

僕は安倍政治と対峙しながら、それなら自由や民主主義は何処にあるのか、可能性も含めて何処にあるかを考え、自問してきた。自由や民主主義は言葉として存在し、流通しているが、それはどこにも存在しない。それが現実である。それは横行する言葉とは裏腹に不在であり、空白あり、未来から視線としてだけある。ただ、権力や体制に抗う運動の中になかにそれが散見できるだけである。ロシアの侵略に抵抗するウクライナの人々に姿に垣間見られるように。このことは僕らが安倍政治と闘う時に困難性としてあったし、民主主義の困難性でもあった。これは安倍政治を国葬として権威化した岸田等との今後にも続く事でもある。ここでは書かなかったが、国家意思を戦争が可能な方向に組み直そうとしたことへの闘いとしてもある。この点については安倍の残した負の遺産としてはっきりさせたいと思う。